

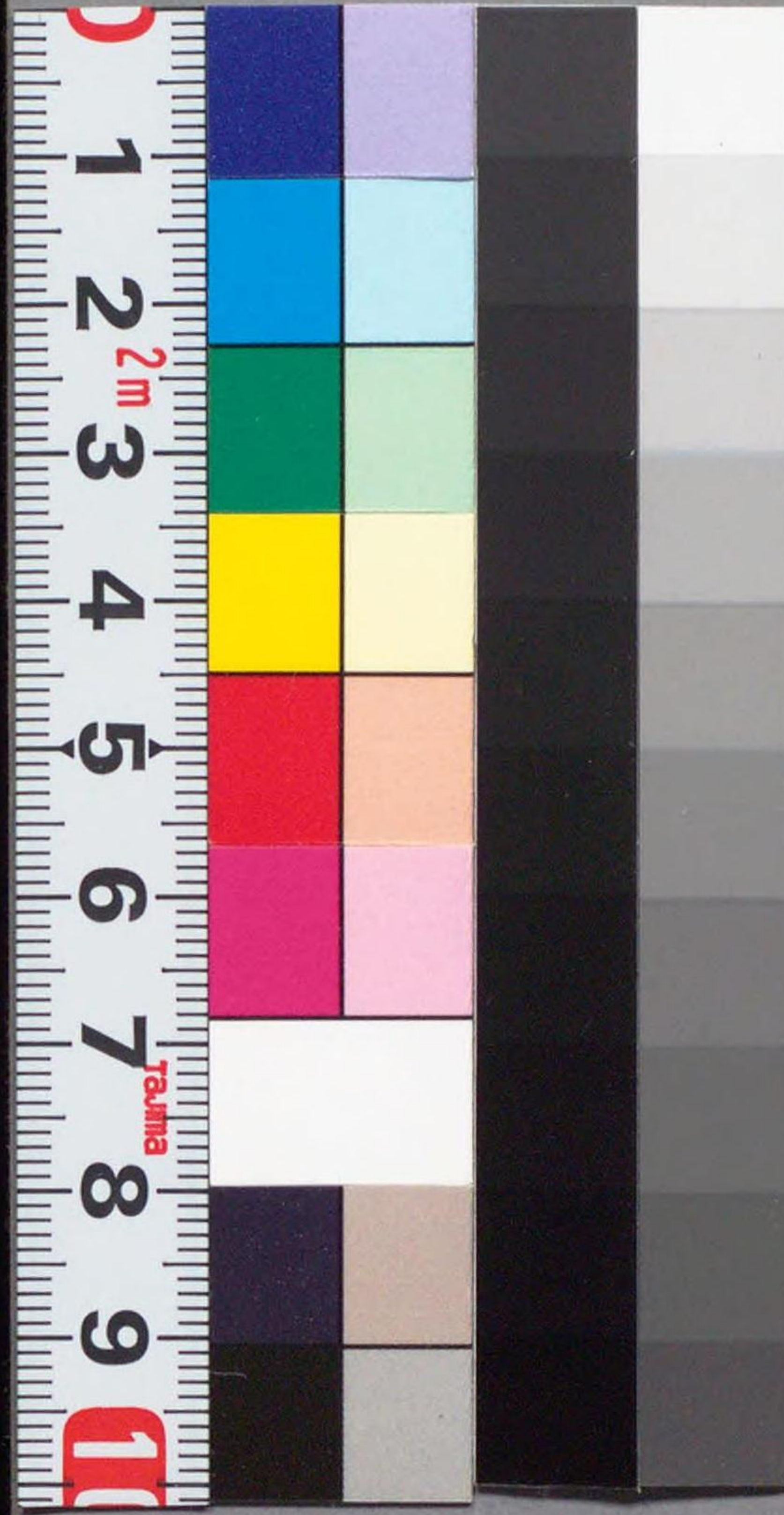
子規資料展示会目録

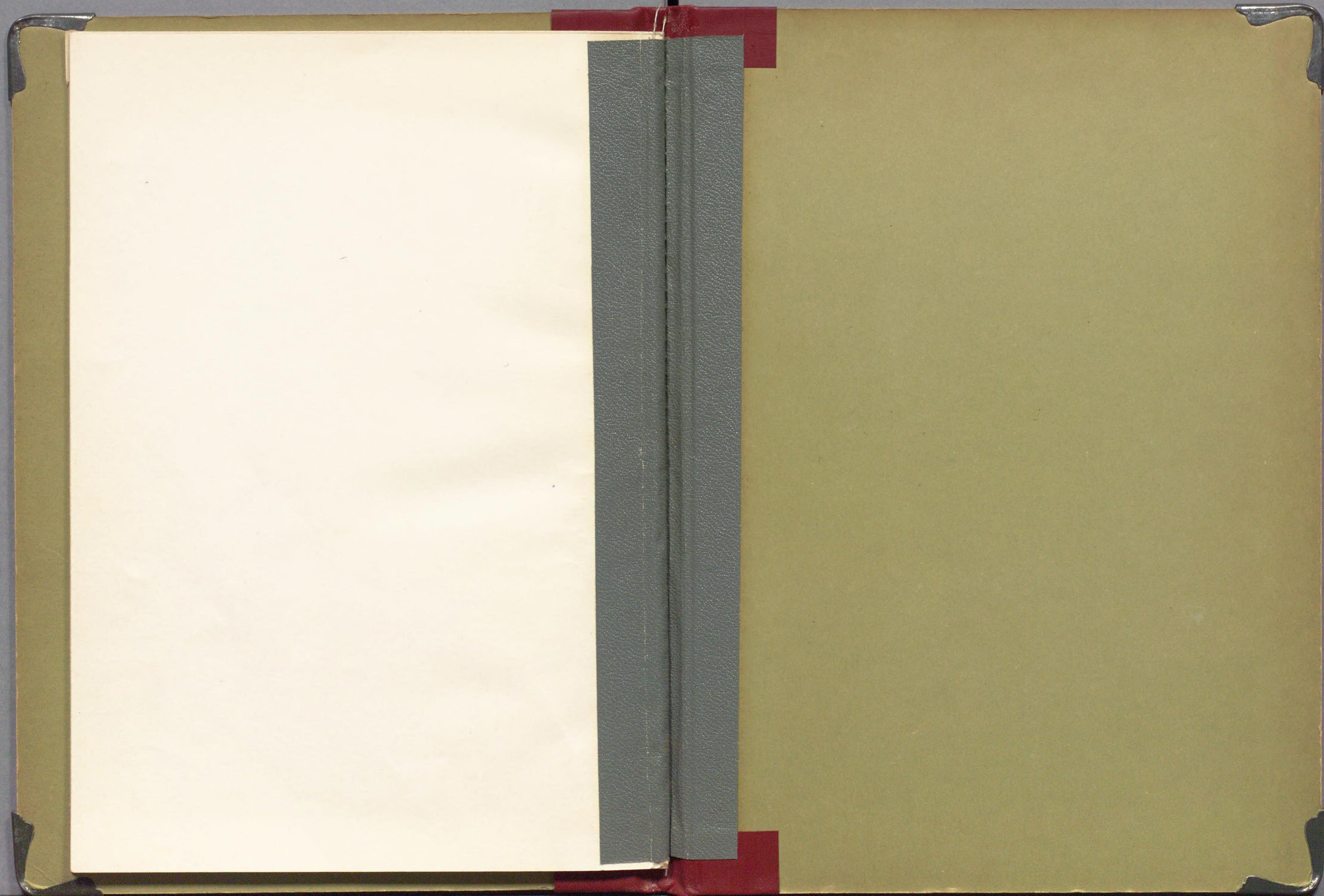
国立国会図書館

910.28
M214K2s



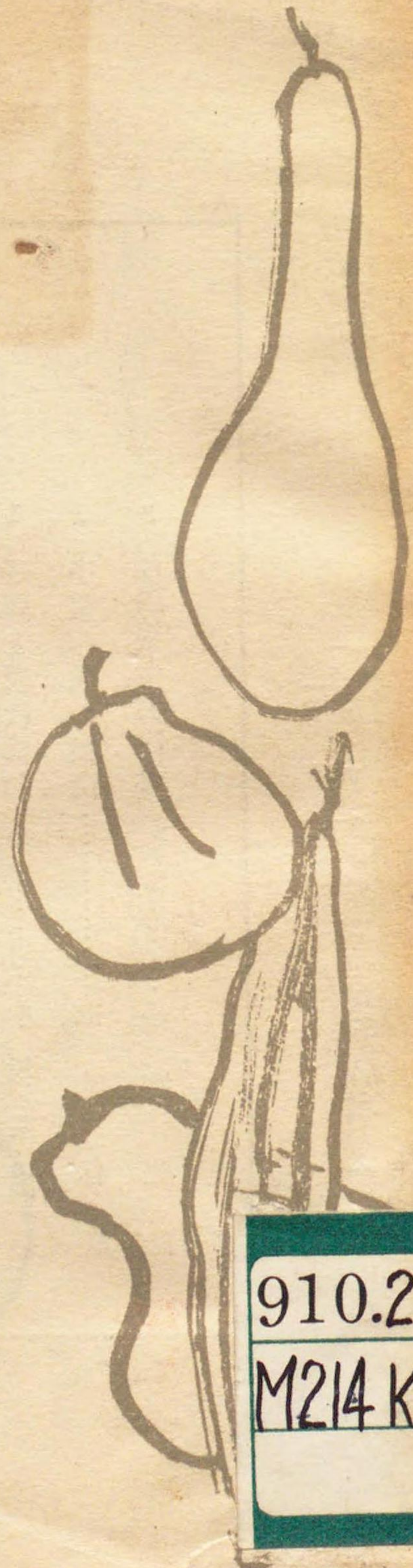
00257081





子規資料展示会目錄

國立國會圖書館



910.28
M214 K24

一般資料類

91028M214K2A

子規資料展示会

会期 昭和二十六年九月十四日(金)から

九月十九日(水)まで

場 国立国会図書館「羽衣の間」

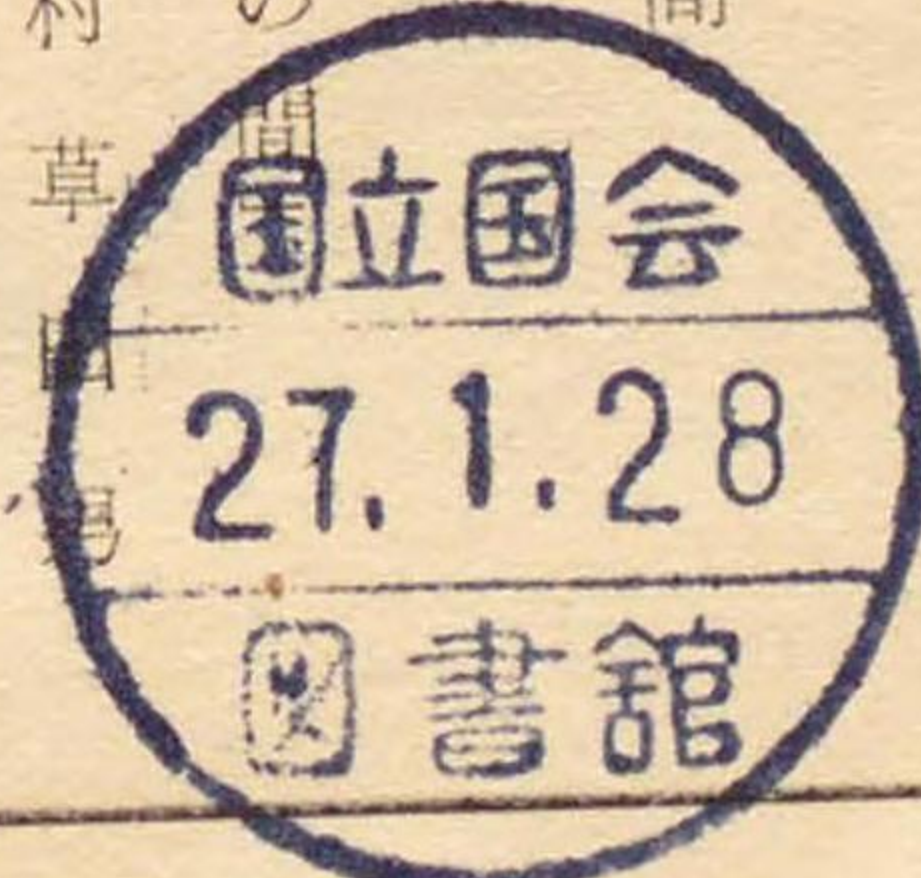
演会 九月十六日(日)午後一時—四時

国立国会図書館「彩らんの間」

1 子規と現代俳句……………中村草

2 子規作歌の根源……………五味保義

3 俳諧史上における子規の位置……………小宮豊隆



序

子規逝いて既に五十年になつた。彼は短歌については万葉復古をとまえ、文に於ては写生文を鼓吹し、俳句についてはこれを文学の一部なりと宣言した。たしかに、明治中期を彩る比類稀な異彩であつた。子規なかりせば明治の和歌俳句にどんな推移をとつたであろうか。何人も察し得ぬかも知れぬ。しかし美しきものは短し。子規は早く逝いて事業を完成するものは後代人でなければならなかつた。心さみしい次第である。折から奇縁にも、子規の大部分の稿本を本館に收藏することになつた。私達はこの機会を活用して貴重な資料を広く同好の人人と共に展観し、しみじみと故人の業績を偲びたいと思ふ。

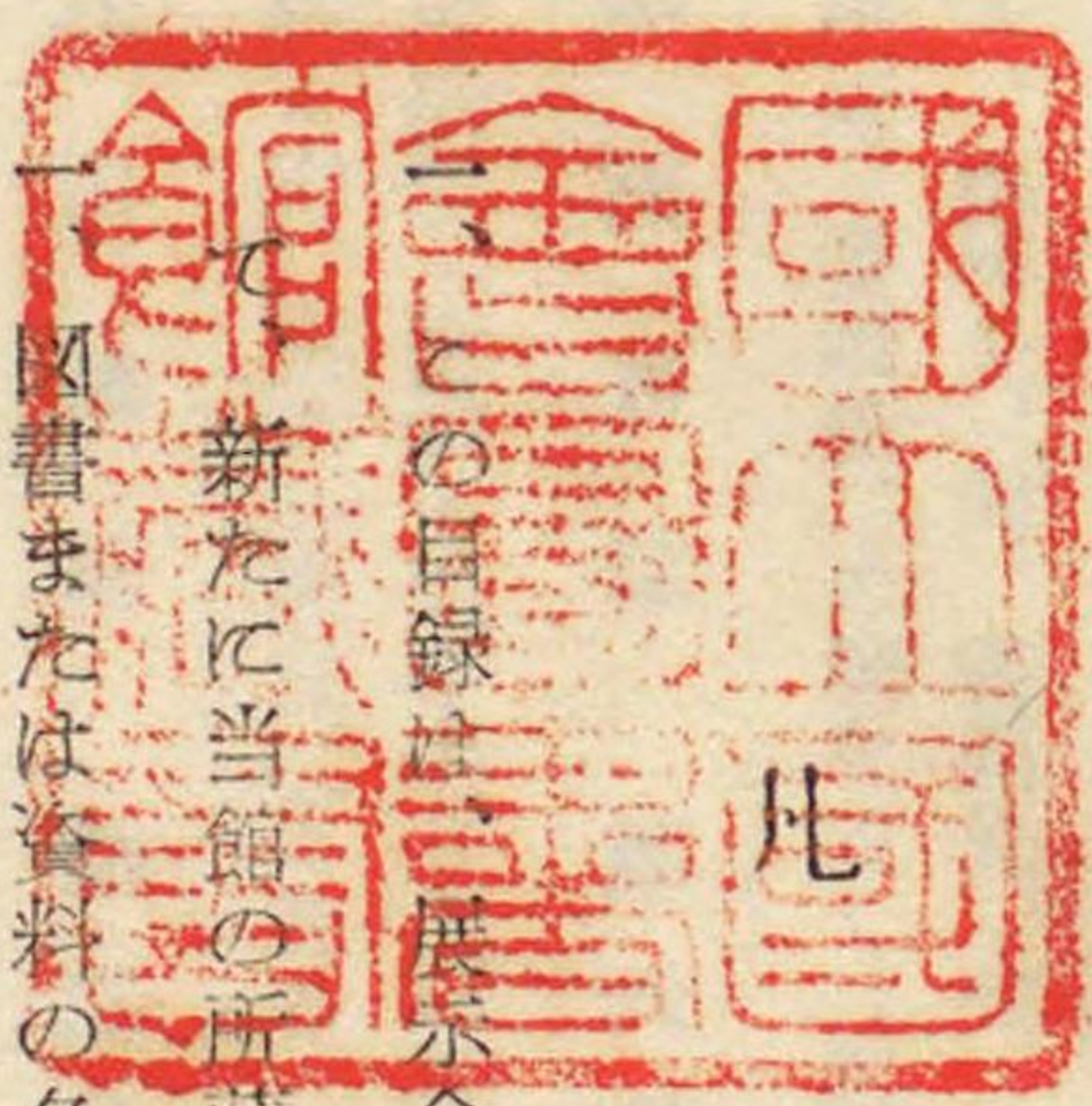
昭和二十六年九月

国立国会図書館長 金森徳次郎

257081

国立国会図書館蔵 金森漸次館

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "例" and "表紙"）



例

の目録は、展示会をみるための参考資料として編さんしたものであるが、兼ねて新たに当館の所蔵となつた子規関係資料の解題ともした。

一、書名または資料名の下の数字は、目録の編者が仮に与えたものがある。だが、通称のないものには、目録の編者が仮に与えたものがある。

一、書名または資料名の上の数字は、陳列の位置を示すものであるが、会場では、多少前後していることもある。

一、書名または資料名の下に記号は、当館の図書請求番号（分類記号）である。

一、目録の本文は、資料の性質上、旧来のかなづかいを用いた。

一、表紙の図版は、岩波書店複製の「仰臥漫録」第二巻にみられる子規スケッチの瓢、糸瓜、夕顔の図。題字は、金森館長。



一、櫻亭雜誌 第四号

○四九、一—M二二四〇

表紙に「明治十二年五月十五日木曜発兌、雷雲舎」、奥附に「愛媛県松山湊町老番地、本局雷雲舎。社長人「桜亭仙」人。編輯長、同。書記長、同。毎木曜日、出版。」とある。子規十三歳当時の小廻覧雑誌。投書作文、雑報、詩歌類、雑録、書画類、の欄を設く。縦二〇・七センチ、横一三・八センチ。表紙共十葉。

二、辯論雜誌 第六号

○四九、一—M二二四b

表紙に「明治十二年十月十三日発兌、弁論社」、奥附に「本局、弁論社。社長、海南不美男。編輯長、孜々猫。書記、斑々狗。第六号発兌。」とある。子規十三歳当時の弁論の草稿。縦二〇・五センチ、横一四センチ。表紙共十葉。

三、松山雜誌 第三号

○四九、一—M二二四m

表紙に「竹水社」、奥附に「本局、竹水社。社長、愛乎書生。編輯長、生死書生。書記、於怒戲書生。毎月三回発行。」とある。舎説、論説、記事文、雑録、詩歌類、雑報、などと分けてある。子規当時十三歳か。「桜亭雜誌」の前身らしくも思われる。未詳。表紙共十二葉。大きさ、「桜亭雜誌」に同じ。内容亦略々同じ。

四、五友雜誌 第五号

九一九、六—M二二四g

表紙に「明治十三年庚辰年十月十五日発兌、温知社。」として「温知社印」あり、奥附に「本局、温知社、毎月二回発兌。」として「五友」の印あり、「社長兼編輯長、東岡散人。書記、好吟童子」と記し、裏表紙に「正岡常規所携」とある。表紙の裏に左の識語がある。

明治廿九年一月卅一日 根岸子規識

病シテ褥ニ在リ長夜悶々偶々五友雜誌等数冊ヲ得タリ披イテ之ヲ讀ム十五年前ノ事彷彿眼前ニ在リ今昔ノ感ニ堪ヘズ只作者ノ名假名ヲ記ス今已ニ其誰タルヲ知ラザル者アリ他日更ニ今日記スル所ノ者ヲ併セテ忘却シ去ラン事ヲ恐レ左ニ之ヲ記ス

- 南 溪(森 知之)
- 東 岡(竹 村 鍛)
- 南 寢 惚(太田 正躬)
- 南 海(松浦 正恒)
- 南 嶺(稻川 元善)
- 好 吟(正岡 常規)

即ち子規が十四歳(明治十三年)当時編輯した漢詩文の小廻覽雜誌で、五友は、太田柴洲(正躬)、竹村鍊卿(鍛)、三並松友(良)、安長松南(知之)、正岡香雲(常規)の五人とされてゐるが、此の第五号には、前記松浦正恒(南海漁夫)、稻川元善(南嶺)の作や、「雲外狂史」の投稿なども含んでゐる。三並松友の作は見えず。縦二〇・七センチ、横一三・八センチ。表紙共十葉。上欄に廻覽した同人の書入がある。

五、五友詩文 第拾号

表紙に「明治辛巳十四年一月十五日發兌」「温知社印」、奥附に「社長、東岡散人。書記、柴洲。」とあり、裏表紙に「升所携」と記す。表紙の裏に第五号と同時とおほしく、子規の筆跡で左の如く記してゐる。

- 香 雲 正岡 常規 十五
- 南 溪 森 知之 十六
- 東 岡 竹 村 鍛 十七
- 松 窓 同
- 柴 洲 太田 正躬 十七

年齢

- 松 友 三 並 良 十七

即ち子規十五歳(明治十四年)。前記「五友雜誌」の続刊とみられる。大きさ、紙数、書入、同誌に同じ。

六、莫逆詩文 第壹集

九一九・六—M二一四b

奥附に「明治辛巳一月廿日發兌。香雲散人編輯」とあり、五友および、南海(松浦正恒)南嶺(稻川元善)、雲外狂史の漢詩文を編んだ小廻覽雜誌。縦一九・五センチ、横一三・五センチ。表紙共十四葉。「五友詩文」と僅かに五日を隔てて作られてゐる。

七、近世雅感詩文

九一九・六—M二一四k

「明治十四年六月六日發兌」の第五集から、第六、第七、第八まで、及び第十集がある。「明治辛巳十一月廿三日」と第十集表紙にある。明治十四年下半期の漢詩文の小廻覽雜誌。大きさ「五友雜誌」等と略々同じ。第五集表紙共十二葉。第六、七、八集亦同じ。第十集十一葉。第五、六、七集奥附によれば詩社の名は「清興社」。第六、八集裏表紙に廻覽者の認めあり、上欄に各集共廻覽者の書入あり、作者には五友および、竹石軒、菊田照春、鐘鄰、(五集)拓北漁夫、松浦螢窓、清矣、(六集)老牛、股雷居士、六茶九茶(七集)等の名や別号が見える。なほ、第七集裏表紙に子規後年の筆跡で

- 老 牛 富田 才 某
- 鐘 隣 土屋 久 明
- 清 矣 太田 正躬
- 竹石軒 竹 村 鍛

と記してゐる。

八、同親会温知社吟稿

九一九・六一M二一四d

表紙に「正岡香雲」とあり、明治十三年十月十八日より明治十五年六月卅日に至る漢詩の吟稿で、日附は三十三次に分れてゐる。作者は例の五友のほか、武市子明（庫太）、柳原正之、梅木、らの名が見える。添削批評の朱筆が一面にはいつてゐるのは彼等の師河東静溪の筆である。大きさは「五友雑誌」と同様。表紙共七十様。

九、自笑文章 第一編

九一四・六一M二一四z

明治十一、二年（子規十二・三歳）当時の作文を、明治十五年六月下旬に自ら編んだ文集で、改造社版全集第十二卷所収同題の篇と同文。但し、「遠山景讓先生曰」「遠山先生曰」と評語が内八篇に附してある。縦一六・七センチ、横一二センチ。表紙共二十三葉。

十、詩 稿

九一九・六一M二一四s

表に「同親吟会」とある。竹村鍔、正岡常規、武市庫太、宇高良則、らの名が見える前半は松山にて河東静溪の添削を乞うたものらしく、後半は「送柳原如水遊學東都」以下、内藤鳴雪とおぼしき朱筆で批評が加へられ、子規の詩稿のみである。なほ墨筆の批評が前半後半を通して散見するが筆者未詳。

「舟達波止浜」「舟中夜半」「舟過八島」「播州洋」二首、「舞妓湾」「神戸」等、「東海紀行」と重複するもの後半にあり、明治十六年六月上京当時成立の稿本と認められる。縦二七センチ、横二〇センチ、表紙共十葉。

一一、東海紀行

九一五・六一M二一四t

明治十六年六月上京途上の紀行文の草稿で、改造社版全集第十二卷所収本文と同文。但し、最初漢文で書かうとした

書き出しの部分（二丁及び二丁オ）を合綴。廿二行詰両面罫紙十一葉。表紙なし。

一二、筆まかせ

九一四・六一M二一四h

明治十七年から明治二十五年に到る雑纂の草稿四冊で、その大部分は改造社版全集第十一卷全部を之に当て、収録されてゐるが、未だ採録されざる部分も少しとしない。たゞ残念なことには、未採録の記事の甚だ多い第二編、第三編に落丁も亦非常に多いことである。その落丁は生前子規が削除破棄せしめたものか、或は歿後関係者の手で切り取られたか、子規が自ら附けた細かい目録に記載されてゐる本文の抜けてゐる個処が第三篇二十六ヶ所、第二編九ヶ所に及ぶ。その大部分は子規宛來簡の写しであるが、短い文章で切られてゐるものも可なりある。又、墨で棒を引いて消してある短文で、子規自身の抹消か否か不明なものもある。併し、此の四冊の草稿の目録ならびに未採録稿の断片は、少年時代の資料と共に、上京後数年の無名時代を研究する者に多くの示唆を与へるであらう。第四編のみは表紙なく未装幀。

一三、つゞれの錦

九一〇・四九一M二一四t

題簽下部に「自明治廿三年二月至同十月」と記す。此年二月、常盤会寄宿舎に戒田四舟、若隠居（五百木飄亭）、佐伯蛙泡、あはてやぬかり（河東可全）、新海非凡（非風？）、伊藤鉄山、子規らが「もみじ会」なるものを作り題を課して毎月、歌や俳句や戯文戯画を持ち寄り廻覧合評した。改造社版全集第十二卷に所収の本文は、その内の子規の作だけを録してゐる。此の稿本は前記七名全部の作を合綴してをり、なほ竹村鍔、非風、可南、その他の名も見える。紅葉会は第一回が二月十二日、第二回が三月十一日……第七回が十月二十三日に集まつてゐる。

一四、銀世界

九一三・六一M二一四g

明治二十三年一月に作られた小説の稿本で改造社版全集第二十巻所収と同文。全篇に書入あり、赤インクのペン書きは夏目漱石、「南塘」と署せるは内藤鳴雪、「隠居」とあるは五百木颯亭。漱石の評語は漱石資料としても貴重なものである。「猫」より十五年前。

一五、諸先生 詩 稿

九一九・六一M二一四s

明治十五年より明治二十八年従軍当時に至る漢詩の草稿で、明治十五年の分は「会稿」(五月)「吟稿」(六月)「詩稿」(七月)などと称し(ここまでは武市庫太の作を共に録す)。「吟稿同親会」(九月以後、五友の作をも録す)ともあるが、明治十六年以降は自作が殆ど全部で、内藤鳴雪、竹村鍛、浦屋寛(雲林散人?)、河東静溪、本田幸、等の朱筆が加へられてゐる。篇中、例の「岐嶺雜詩三十首」(明治二十五年)もある。表紙に「癩祭書屋主人」と記す。

一六、漢 詩 稿

九一九・六一M二一四k

表紙に「秋風落日舎主人」と記し、初め「青苔黄葉」と題して消して右に「漢詩稿」と書いてゐる。第一の扉は「莞爾先生詩稿、自明治十一年至同十五年」と書き、第二は「吟稿、自明治十六年至同十八年、癩祭魚史」と認め、第三部は「吟草、自明治十九年至同二十一年、龍尾道人」と署してゐる。明治二十二年以降二十九年までの部分と第三部の間には白紙が一枚挿んであるのみで、無題。改造社版全集第十七巻所収。

一七、病 床 日 誌

九一五・六一B九九

明治二十八年五月二十三日子規が神戸病院に入院した当時、看護に當つた碧梧桐、虚子、叔父大原氏らが附けた日誌である。子規の修補もまじつてゐると云ふ。五月二十七日から七月二十日に至る。半紙横折、表紙白紙共三十九葉。縦一二・五センチ、横三三センチ。本文は改造社版全集第二十巻所収と同文。日附に朱筆で圈点を附した者は子規ら

しく、一丁表に「廿三日夜入院、廿四日竹村氏来ル」と補筆した子規の朱と同色である。

一八、散 木 弁 歌 集 抄

九一一・一〇八—M二一四s

改造社版全集第二十二巻所収「和歌手抄」が之に当る。「散木弁歌集四冊抜萃」「田安黄門宗武卿詠歌集」「草山和歌集手抄」「瓊浦集初編二冊抄」「ひなさへつり二冊」「柿園詠草二冊」「摘英和歌集二冊抄」「五十楓搔葉集三冊手抄(遺稿)」「調鶴集三冊抄」「橘曙覽遺稿志濃夫廻舎歌集手抄」等の書抜きを合綴したもので、柱字の位置に朱筆で、「散木奇歌集抄」の部分は「正月」「二月」等の月並及び「祝」「別離」「驛旅」「悲歎」「神祇」「釈教」「恋」「雑」「長歌」「旋頭」「混本」「隠題」「連歌」と部立を記し、見出しにかへてゐる。「草山和歌集手抄」と「田安宗武卿集」には之がない。「瓊浦集」以下は柱、の朱が一集一種で、「瓊浦」「泉円」「諸平」「摘英」「久胤」「文雄」「曙覽」と記してゐる。なほ、統計その他一二朱筆で書かれた箇所があり、「散木奇歌集抄」の詞書や部類の上の圈点は朱である。紙は新旧種々あつて、浄書修正等の為挿しかへたらしく見える。「田安宗武卿集」は全集未採録。書き抜いた年代は不明である。明治三十年前後と推定されるのみ。

一九、寒 山 落 木

九一一・三六一M二一四k

言ふまでもなく全集巻頭にある子規句集の自筆稿本である。全五冊。題簽、小口、すべて子規筆。第四冊はすでに全集に二回(アルス版、改造社版)筆跡のまゝ、凸版で印刷された。第一冊は明治十八年に初まり第五冊は明治二十九年に至る。

二〇、俳 句 稿 (残 欠)

九一一・三六一M二一四h

「寒山落木」に続く句集の自筆稿本であるが、明治三十年及び三十四年、三十五年が欠けてゐる。「明治三十一年俳句

稿」と表書きのある一冊は明治三十二年をも全部含み、「俳句稿、明治卅三年ヨリ」とある一冊は明治三十三年全部と三十四年新年の初三句のみを含む。改造社版全集第三卷所収。

二二、発句会稿

911.36-14214h

明治二十六年一月から明治二十九年十月に至る所々の俳句会の席上で書かれた稿本で、四冊あり、「明治二十六年上」「明治二十六年下」とある二冊は「発句会稿」と題され、他の二冊は小口に「俳句会稿」と記され、「明治廿六七八九年」と「明治廿九年下」とに分れてゐる。此の内第三冊は題簽なし、明治二十六年の句会には伊藤松宇、藤野古白、藤井紫影、その他紅葉会の仲間まで一座してをり、二十九年になると、紅葉、碧梧桐、虚子が現れ、二十九年の四月十二日には「不忍弁天堂僧坊に於いて」「古白一周忌」が修せられ、十月二十六日には「目黒不動前茶店福嶋や小集兼露月送別」句会が催されてゐる。この「栗飯目黒小集」まで見出しのついてゐる句会は四冊小計三十五会。子規を催主とするもの十六次、虚子の催したものの二回。明治二十年代俳壇史の生まゝしい資料である。

二三、子規庵歌会稿（仮称）

911.167-14214h

257031

明治三十二年前後に子規を中心に催された歌会の草稿で、合綴もされず、表紙もなく、一回分づつ、こよりでくくつたものが十冊ある。

- 一、「明治三十一年三月二十五日和歌第一会」と子規の追つて書きのあるもの。碧梧桐、虚子、子規、露月、墨水、把栗、秋竹ら参会。
- 二、日附なく一丁表に「即景即事」とあるもの。秀真、子規、鹿州、芳雨、恕堂ら参会。明治三十二年三月十四日の歌会とみとめられる。
- 三、日附なきもの。明治三十二年四月とみとめらる。改造社版全集第六巻口絵参照。秀真、子規、岡麓、青々、白雲、

二四

芳雨、木の芽、鹿州ら参会。

四、「明治卅二年夏六月」とあるもの。追記「六月」は八月の誤とみとめられる。改造社版全集第六巻「短歌第二会」参照。飄亭、子規、虚子、潮音、安民、碧梧桐、芳雨、一雄、秀真、鹿州ら参会。

二五

五、「明治卅二年七月二日根岸草廬小会」とあるもの。子規、碧梧桐、芳雨、鹿州、一雄、秀真、安民ら参会。第一回「短歌小会」にあたる。

六、「明治卅二年九月三日」と子規の追記あるもの。子規、潮音、安民、芳雨、秀真、虚子、一五坊、格堂ら参会。「短歌第三会」

七、「明治卅二年十月」と子規が追記せるもの。青々、墨水、虚子、子規、不可得、訥庵、潮音、三子、安民、秀真、湖月、格堂、碧梧桐ら参会。「短歌第四会」

八、「明治卅二年十一月」とあるもの。子規、不可得、格堂、三子、安民、鹿州、一雄、秀真、麓、碧梧桐ら参会。「短歌第五会」

九、「十二月三日会」と当時の朱筆で記せる上に「卅二年」と墨で追記したもの。子規、興安嶺、不可得、茂春、秀真、湖月、格堂、虚子ら参会。「短歌第六会」

十、「明治三十三年一月七日会」と朱書せるもの。茂春、鹿州、麓、秀真、子規、格堂、不可得、三子、安民、一五坊、幸男、碧梧桐ら参会。

右の如く、香取秀真、岡麓らと共に未だ俳人が作歌してゐる点で注意される。短歌革新初期の貴重資料である。

二三、俳家全集

九一一・三〇八—M二一四h

五冊の自筆稿本。言ふまでもなく子規が作者別に、大体年代順に、江戸末期までの俳句を抜萃したもの。改造社版全集の第十三巻及び第十四巻に収められてゐる。

二四、一家二十句

九一一・三〇八—M二二四 i

「俳家全集」と略々同性質の編著の自筆稿本で三冊に分れ、「一家二十句上、西子選」「一家二十句下、螺子選」「一家二十句蘭秀之部」と表紙に題せられ、半紙一枚づつを一作者に割り当てて(約二十句)編んだ、やはり一種の作者別俳句選集で、「上」冊の終りに内藤鳴雪、石井得中、伊藤松宇、森猿男、正岡子規、勝田明庵、新海非風、五百木飄亭、故藤野古白、河東碧梧桐、高浜虚子、の各二十句が、それ／＼一家として抜萃されてゐる。「俳家全集」と勿論関係があるが、両者の先後、別個の企図と見るべきか否か、等の問題はなほ検討を要する。

二五、分類俳句全集

九一一・三六一—M二二四 b

稿本六五冊。積み上げると一メートル七三センチに達する。第一冊から第三冊までは歳旦、第四冊から第十七冊まで春、第十八冊から第三十冊まで夏、第三十一冊から第四十五冊まで秋、第四十六冊から第五十三冊まで冬。第五十四冊から第六十四冊までは「乙号」で、建築、飲食、器物、武器、玩具、楽器、舟車、外国品、女流、人倫、肢体、文書、地名、釈教などと表紙に書いてゐる。第六十五冊は「丙号」で「修辭学材料」と表紙の右肩に記してゐる。表題も各冊まち／＼で「発句類題全集」と記せるもの三十四冊、「俳句分類全集」と記せるもの十二冊の外、類似の異題が三四ある。

二六、飲 食 考

三八三・八M二二四。

子規が明治三十年代に入つて着手した考証未完の稿本である。改造社版全集第十四巻の終りに収録されてゐる。

二七、獺祭書屋・藏書目録

〇二九・九—M二二四 d

子規が其の藏書を自ら分類整理した目録で、全体を文学門、音曲門、絵画門、工芸門、美術門雜、歴史門、地理門、語学門、法政門、兵書門、科学門、哲学門、索引門、紀行門、雜書門、自著門の十六に大別し、音曲門、歴史門、語学門、科学門、哲学門は更に各門を和書部、漢書部、英書部に分け、文学門のみは、和歌部、俳諧部、狂歌部、狂句部、漢詩部、Poetry部、和文部、漢文部、洋文部、小説部、雜書部に分ち、小説部のみを更に第一類和書、第二類漢書、第三類英書としてゐる。改造社版全集第十八巻所收の目録は全集編纂者が分類を勝手に改めた物であるから、勿論一致しない。

二八、子規居士寫「鶉」

七二一・九—M二二四 u

子規が水彩で画いた軸で、背に「子規居士寫鶉、鼠骨認」とあるが画面には文字一つもなく、只一つがひの鶉が画いてゐるのみ。画面縦二五・四センチ、横三四センチ。改造社版全集第十巻所收の小品「根岸草蘆記事」(明治三十二年十二月)に、「今年の春、又虚子から生ける鶉の番ひをもらふた。」云々とあるのが年代推定の手がかりである。改造社版全集第十四巻口絵に写真あり。アルス版では第十二巻口絵。

二九、子規居士寫「鉢雞頭」

七二一・九—M二二四 h

子規の水彩画で、軸の背に「子規居士寫鉢雞頭、鼠骨認」とあり、箱入で、箱の蓋の裏に「菓物帖草花帖写生時代晩年の作品也、鼠骨題」とある。アルス版全集第一巻口絵に写真あり。画面縦三九センチ、横二六センチ。

三〇、菓 物 帖

七二一・七—M二二四 k

明治卅五年六月から八月にかけて、病床の子規がくだものを画いた画帖で、縦十二センチ、横九・二センチの折本で、初めに「コレハ蘇山人ガ支那ニ赴ク時持チ来リテ何カ書ケト言ヒテ残シ置キシ帖ナリ其後蘇山人逝キテ此帖ニ主

ナシ乃チ取りテ病床イタヅラガキノ用ニ供ス名ツケテ果物帖トイフ云々と自記してゐる。六月二十七日の青梅を書き初めとして八月六日の鳳梨(パイナップル)に終る。帖中に為山筆の果物でない画が二枚まじつてゐる。終りに

青梅をかきはじめなり菓物帖

南瓜より茄子むつかしき写生哉

病間や桃食ひながら李画く

画かくべき夏のくだ物何々ぞ

画き終へて昼寝も出来ぬ疲れかな

の句が記されてゐる。画は各葉とも、月日、天気、果物の名を絵の具の筆で註記してゐる。題簽に「菓物帖」と書き

その下部に「明治卅五年、六月ヨリ、八月マデ」とある。

三二、草花帖

七二一・九一M二一四k

題簽に「草花帖、明治三十五年八月」とある。縦一四・三センチ、横一七・五センチの折本で「果物帖」に続く明治三十五年八月に画かれた草花の画帖である。八月一日筆の秋海棠に初まり、八月二十日午後の牽牛花(アサガハ)に終る。画帖はもと中村不折からあづかつた物だつた。「果物帖」と同様、製作の月日を記し、草花の名、別名等を註してゐる。「熊坂といふ謡きゝて」云々と詞書して三句を記した一葉は子規の筆ではあるまい。右の「果物帖」と此の「草花帖」とが子規の最も晩年の資料として珍重すべきは言ふまでもない。

三三、絶筆三句

九一一・三六一M二一四z

子規が亡くなる前日(明治三十五年九月十八日)午前、画板に紙を貼らせ、仰臥のまま、「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」を記し、次に「をととひのへちまの水も取らざりき」を記し、最後に「痰一斗糸瓜の水も間に合はず」を記した

と伝へる。紙は現在縦三一センチ、横四四・三センチで軸になつてをり、箱の表に「嗚呼是子規居士之絶筆、七十一鳴雪」と書かれ、箱の蓋の裏に、「大正六年九月十九日同人相集為故居士修十五周年法会適因其乞題此篋上今昔之感豈啻莪山与洋水、七十一叟鳴雪」と記さる。

三三、新酒の句

九一一・三六一M二一四s

「馬しかる新酒の酔や頼冠、病中子規」とある一軸。紙面、縦一メートル半、横一九・六センチ。箱の蓋の表に「子規居士新酒句」と記し、裏に「子規居士の仰臥生活にては半折揮毫不可能にて漸く小半折也、鼠骨題」とある。

三四、子規居士寫面形

七二一・九一M二一四m

子規が画いた物で、凶案化した人の顔を画き、その下に鸞替(ウソカヘ)の鸞らしい鳥と奇妙な福神らしきものが画いてある。鳥の尾や福神の裾は削掛(ケヅリカケ)の木のやりに書いてある。画面の右肩に小さく「原人」と記してある。小正月に床の間に掛けた物でもあるか。未詳。軸の背に、鼠骨氏の筆跡で、「子規居士写面形」とある。縦三八・七センチ、横二六センチ。

三五、子規書カルタ

俳句が九八枚。短歌の下の句の取札が一五四枚。説札は新古今時代五八、万葉時代三二、金槐集三一、景樹二八、古今時代五、その他一〇枚かと思ふ。一、二枚の数へ違ひはまだあるかもしれない。総計四〇六枚。どういふ意図で作られたかは不明である。

三六、墨汁一滴(切抜)

九一四・六一M二一四b

明治三十四年二月十六日から七月二日にかけて新聞「日本」に発表したものの切抜である。改造社版全集第八卷所収の本文と同文。朱で月日の数字をメモし、「別行」にせよとか誤植だとか、二三書き入れがあるが、全集では単行文の時の不備も訂正されてゐる。例へば、五月十一日記の「試に我枕もとに若干の毒薬を置け。而して余が之を飲むか飲まぬかを見よ。」の追記も全集にははいつてゐる。

三七、病床六尺(切抜)

九一四・六―M二一四b

明治三十五年五月五日から死の直前まで新聞「日本」に発表したものの切抜である。改造社版全集第八卷所収と同文。但し「百二十六」「百二十七」の最後の二回は貼つてない。「廿七」回目の所に「弱い感じのものならば抱一の方が旨いであらう」と書人がある。全集では書人どほり訂正されてゐる。

三八、筆の命毛(切抜)

九一四・六―M二一四h

子規の二十代の切抜帖で「日光の紅葉」(改造社版全集第十卷所収)、「野のわかくさ」(同第十八卷)、「文界八つあたり」(同第十七卷)、「春色秋光」(同第十七卷)その他雑多なものが貼つてあり、表紙に「筆の命毛、ほととぎす」と書してある。いかんせん、虫くひが甚しい。

三九、竹の里歌(切抜)

九一一・一六八―M二一四t

明治三十一年の「百中十首」から明治三十三年に至る発表した短歌の切抜帖。貼附されてゐる歌の数は改造社版全集第七卷よりも遙かに少いが、又、全集に見当らぬ歌もある。
註―以上の内、「桜亭雑誌」「近世雅感詩文」第五集、第六集、「同親会温知社吟稿」「筆まかせ」「銀世界」「諸先生刪正詩稿」「漢詩稿」「寒山落木」「俳句稿」「俳家全集」一、二、三五、「一家二十句」「筆の命毛」には

『瀬祭書屋図書』の蔵書印が捺してある。

(以下、支部上野図書館本)

四〇、仰臥漫録

一四七―二二六

大正七年九月十九日岩波書店発行、複製本。

四一、子規遺墨

一一―五三五

大正十年十二月三十日山郎社発行、複製本。「墨汁一滴」の六月二十八日の條、中村不折の人物に就て記せる一節を複製したもの。

四二、子規遺墨集

三〇〇―六四

昭和十年九月十九日巧芸社発行、子規庵保存会編纂。

四三、瀬祭書屋俳句帖抄上卷

八二―四四三

明治三十五年四月十五日発行。俳書堂(高浜清)編輯、文淵堂(金尾種次郎)と共同発行。

四四、瀬祭書屋俳話

三三一―四二〇

明治二十六年五月二十一日上梓。日本叢書の内。日本新聞社印刷。

四五、子規遺稿第一編「竹の里歌」

九五―二八

一五

明治三十七年十一月十三日出版。俳書堂発行。伊藤左千夫、香取秀真、岡麗、長塚節、蕨真、安江秋水、森田義郎、共選。明治三十年以後の短歌五四四首、長歌一五首、旋頭歌一二首を収む。

四六、無花果草紙

表紙に「無花果草紙、辻加連達磨」と署し、「懶祭書屋函書」の藏印あり。内容は改造社版全集第十二巻所收と同文。「自由何クニカアル」のみは罫紙に書し、他はすべて半紙に書す。「天将ニ黒塊ヲ現ハサントス」の日附は朱書。「さとり」の日附は本文の前に在り。「科学ノ原理を讀んで感を書す」は題下に括弧して「中学校学年試験」と書し、左わきに「文科二年生、正岡常規」とあり。「第十六世紀に於ける英国及び日本の文明の比較」は「緒言」の行の下に「沐猴冠者未定稿」とあり。「辻占考」第四例の第五図より第十図までは朱筆を併用して「紅色」を示す。「辻占考」の次に「日本の諺」一篇三十六葉あり。「源氏物語と枕の草子との区別」には「国文学科、正岡常規上」と署さる。「成務天皇以前の日本文学」には「明治廿四年十月七日稿同夜脱稿学年試験の為」とあり。

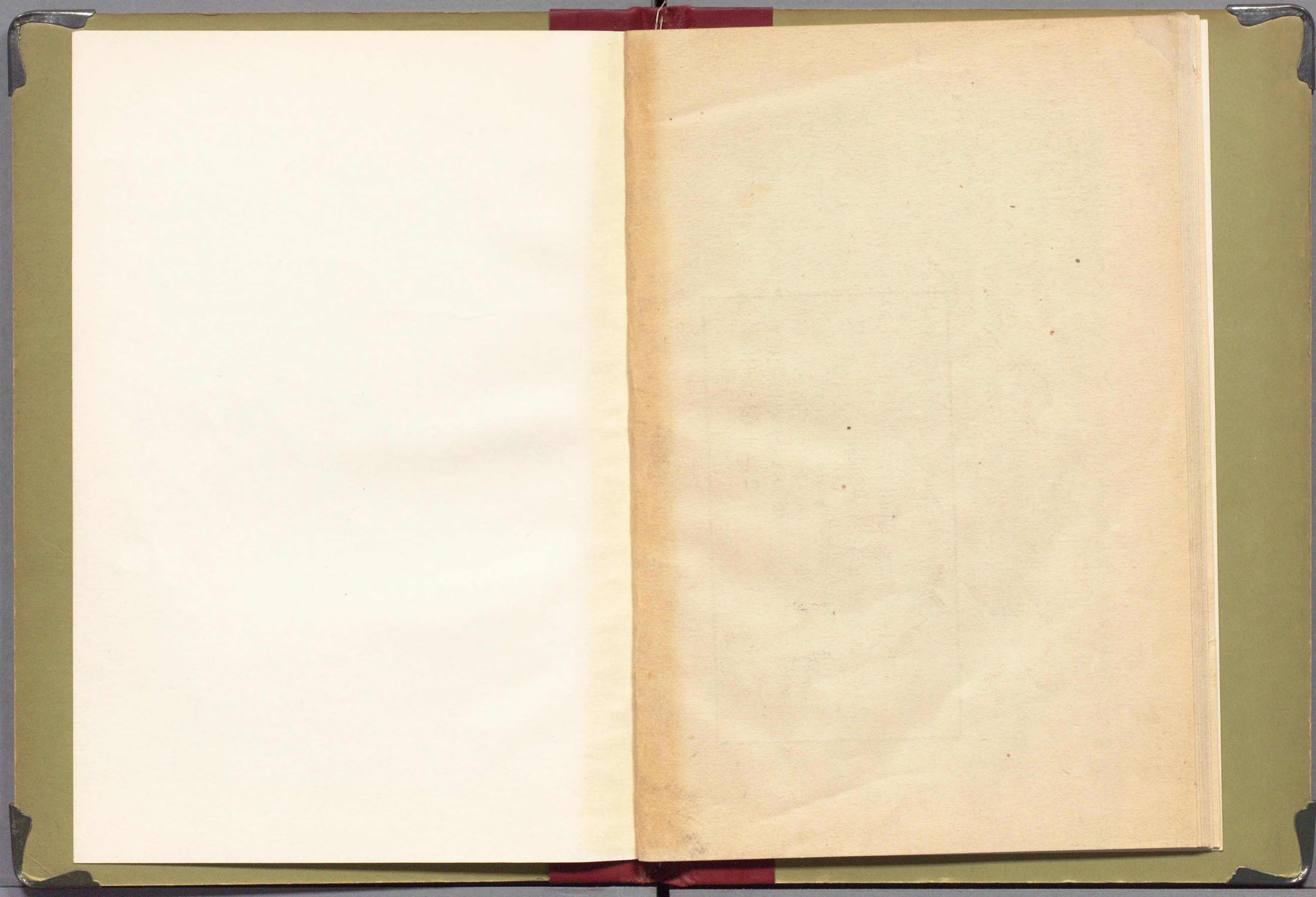
四七、Baseo as (a) Poet

子規が国文科二年生当時の英文リポートで洋罫紙四枚に裏表に記す。横二一・二センチ・縦三四センチ。昭和二十四年十月号「春燈」に発表されたものの原文。全集未收。明治廿四年（九月以後）か廿五年（六月以前）の筆。子規廿五六歳俳句革新運動直前の物である点が注目される。英訳の芭蕉俳句十六句。（前記「春燈」浅野信氏解題参照）

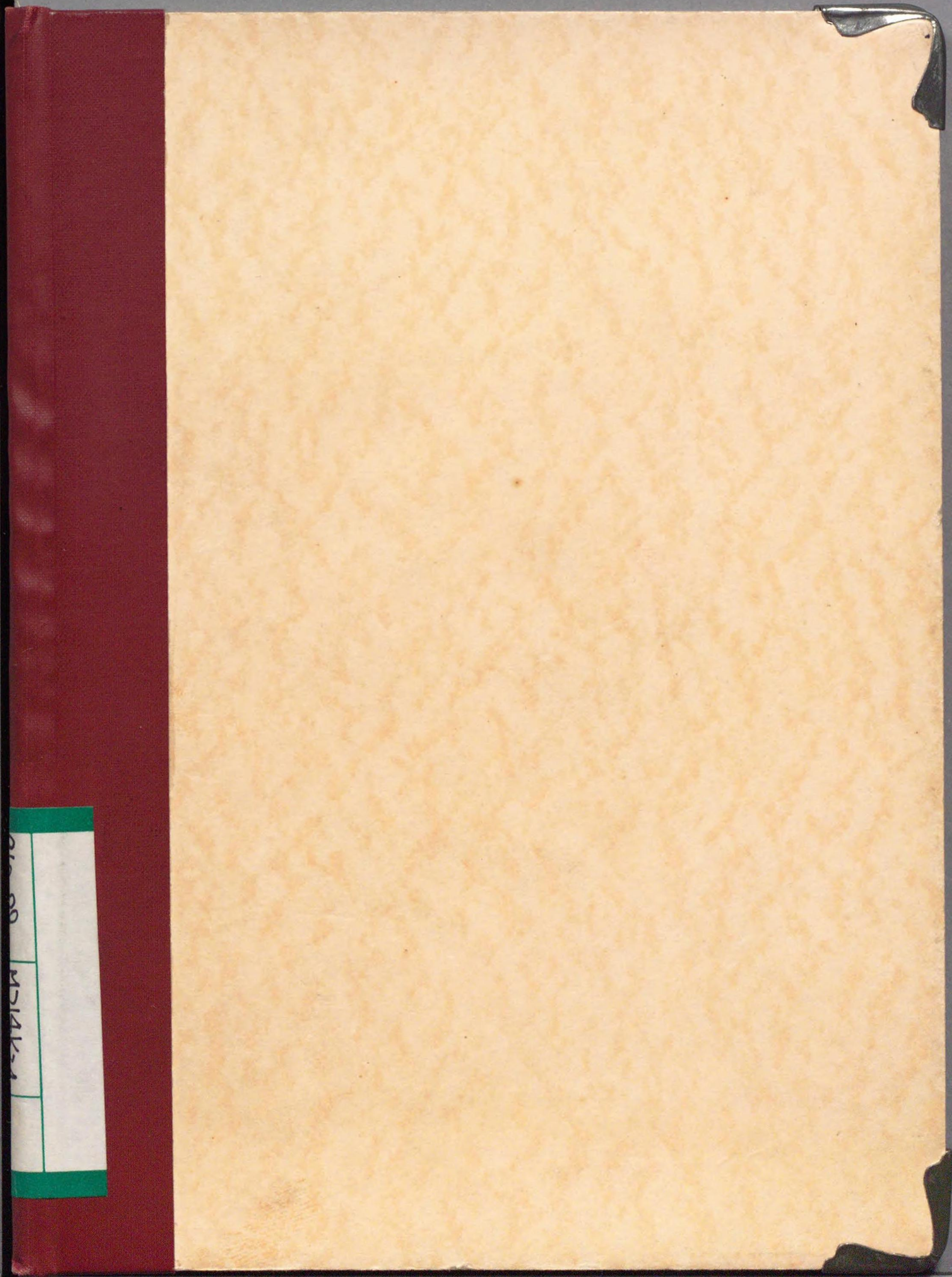
正岡家藏

昭和二十六年九月十日 印刷
昭和二十六年九月十四日 発行

東京都港区赤坂一ノ一
編集発行 国立国会図書館
東京都千代田区飯田町一ノ三四
印刷 統計印刷株式会社







075 00
MADAKA
[Illegible text]